子供の可能性をひらく

地域の
特色ある
活動

宮城県大河原町教育委員会

1　大河原町の概要と教育

大河原町は、宮城県南の中央部に位置し、人口約２万３千人、面積は県内で４番目に小さなコンパクトな町です。

町の中央部に白石川が流れ、春には、高山開治郎翁が百年前に川の両岸に植樹した「一目千本桜」が咲き誇ります。桜は、町民の夢や希望の象徴であり宝物でもあります。

本町には、小学校３校、中学校２校があり、本町の学校教育については、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の、知・徳・体をバランスよく育て、夢や志が実現できるよう、約 160 人の教職員が 1,957 人の児童生徒の教育にあたっています。

2　授業が変わる、子供が変わる

(1)「対話的な学び」のある授業

宮城県教育委員会より令和２年度からの３年間学力向上の指定を受けた大河原小学校で、令和３年７月、文部科学省初等中等局教科調査官の笠井健一先生にご指導をいただく機会を得ることができました。笠井先生が 29 教室全ての授業をご覧になった後に発せられた言葉が、「分かる子だけの意見をつないだ授業です」。私を含め大河原小学校の教員にとって、これまでの授業観を根底からひっくり返されたような大変衝撃的な言葉でありました。

大河原小学校の各学級で行われていた授業は、長年に渡って宮城県の多くの教師が行ってきた授業であり、何の疑問も抱いていませんでした。授業のねらいに効率的に迫るために「分かる子」の意見だけをつなぎ、まとめる授業。そのような授業を続ければ、分からない子は分からないまま、分かる喜びを持てないまま、学ぶ意欲を次第に失っていくことになるのです、と笠井先生に教えていただいたのです。大河原小学校ではこれまでも子供同士のペアや三人グループで課題解決に向けた話し合いの機会を設けてはいましたが、分からない子に寄り添った、子供のつまずきを大切にした「対話的な学び」のある授業にはなっていませんでした。その時から、大河原小学校の教師たちは自分の授業を変えていきました。級友の言葉に耳を傾け、「教え合い」ではなく「学び合い」を目指すようになりました。聴き合い学び合う「対話的学び」のある授業づくりに取り組み始めたのです。

令和５年１月に大河原小公開研究会を開催し、「対話的学び」をとおして「深い学び」を実現する算数科の授業を公開しました。町内小中学校の教員を含め県内から 300 名程の参観者があり、どの教室にも、級友をリスペクトし学び合う子供の姿が見られました。

大河原小学校公開研究会

この姿こそが笠井先生からのご指導に対する応えになったものと考えています。町内の教員も児童の姿から「対話的な学び」のある授業の本質を学び、自校へ持ち帰っていきました。笠井先生のご指導から１年６か月しか経っていませんが、本町の小学校は令和５年度の全国学力・学習状況調査で国語・算数とも全国トップクラスの成績となりました。

教師の仕事の根幹は授業です。授業をとおして子供の可能性を育み、子供の未来をひらくために、本町では、宮城教育大学や宮城学院女子大学の先生を招聘しての授業研究会を各校年 2～3 回実施し、授業力の向上を図っています。また、早稲田大学教職大学院の田中博之先生から、学習評価に関するご指導をいただきながら作成した、授業と評価を往還し、指導と評価の一体化を図るための『年間評価計画』（R5.4）の活用を図っております。

(2) 町教委としての学力向上に関する取組

①算数チャレンジ・数学オリンピック

3人チームで算数・数学の難問に挑戦し正答数を競います。令和5年度は小学生30チーム90人、中学生12チーム36人が参加しました。

②暗唱読本『寿限無』を活用した暗唱

『寿限無』(H28.4)は優れた文学の文章、詩、英語など百編の作品等をまとめた冊子です。それを活用して各学校では「読書百遍意自ずから通ず」の精神で暗唱に取り組んでいます。

③『小学生の英単語』

小学校教科書に準拠し、575語の英単語の発音(カタカナ表記)等を記した英単語ノート『小学生の英単語』を作成(R4.6)し、小学5、6年生に配付しています。英語学習時に教科書と併用したり暗唱時に活用したりしています。

3　健やかな体をつくる

本町の小中学生の体力運動能力についてはコロナ禍以前は全国値をほとんどの種目で上回っていました。コロナ禍でもプールを使っての水泳運動は継続していたのですが、学校休業後の児童生徒の体力等は低下しました。

そこで令和4年度から隣接町の体育系大学である仙台大学と連携し、町内3小学校の児童の体力・運動能力向上に向けた取組を開始しました。大学教授と学生による走・跳・投を中心とした取組で、大河原小は年20回、大河原南小と金ケ瀬小は年10回の実施です。取組の著しい成果はすぐには表れませんでしたが、今後も結果を分析しながら取組を継続してまいります。

また、コロナ禍で中止していました「小学生陸上大会」も4年ぶりに開催予定です。

中学生の体力・運動能力の向上については、全生徒の7割が参加している運動部活動の取組によるところが大きいと考えています。郡大会で優勝、準優勝する部活動も数多くあり、教師の指導でよい成果を上げています。教師の働き方改革である部活動の土日の地域移行については、令和5年9月に推進協議会を立ち上げ、準備の整った部活動から順次移行していく予定です。

4　豊かな心をつくる

本町では、令和元年度から『全学級道徳授業の日』を実施しています。実施日は学校毎に設定し、保護者参観日等に、いじめ、生命尊重、思いやり等を主題とする道徳の授業を行い、児童生徒が考え議論するだけでなく、保護者も参加し多角的な視点からの意見を取り入れ児童生徒の見方・考え方を豊かにしていくことを目的としております。しかし、コロナ禍では「密」回避のため、保護者参加はできませんでしたので、今後、「p4c(ピーフォーシー)」などの手法も取り入れながら心の育成を目指してまいりたいと考えております。

5　志教育の推進

児童生徒が夢や志の実現に向けて努力していく姿には確かな「主体性」があります。その夢や志を育むための志教育講演会を中学生対象に開催しています。昨年度は、大河原町の齋清志町長を、今年度は、地元紙である河北新報の論説員を務め、現在は小説家として活躍している佐藤陽二氏を講師として開催します。地元出身の方の「生き方」を聞くことは、生徒にとってはより身近で、現実味を感じながら、自分の夢や志の実現に向けて努力してくれることと思います。また、本町では、大河原町の先人を紹介した『おおがわらの先人集　志を未来に繋ぐ』(H28.4)を配付し道徳の時間等で活用しています。

6　コミュニティ・スクールの推進

大河原中学校避難所開設訓練

令和4年度から町内5校全てに「学校運営協議会」を導入し、大河原小での「民謡さんさ時雨」、大河原南小での「防災キャンプ」、金ケ瀬小での「伝統芸能　堤神楽」、大河原中での「避難所開設訓練」、金ケ瀬中での「桜の樹保存学習」など地域の方々と学校が一体となって文化や防災の継承に取り組んでいます。熟議をとおして新たな取組も生まれ、ふるさと大河原への郷土愛が育まれています。

これらの取組は、全てが「子供の可能性をひらく」ことにつながっています。

教育長
鈴木　洋